

学校名 京都市立北野中学校

執筆者名 小西信行

研究タイトル	直面する諸課題の解決に向けて、自ら学び続ける態度を育成するための単元開発
--------	--------------------------------------

① 育てるべき資質や能力・・・自分で設定した将来を担う子どもたちを育てるべき資質や能力について、その必要性を踏まえて記述する。	ページ No	1
---	--------	---

主に育成すべき資質/能力のキーワード	メタ認知する力/自ら学び続ける力
--------------------	------------------

「主体的・対話的で深い学び」を軸に据えたコンピテンシーベースの学習指導要領が施行されている。平成 29 年に告示されたころ、「予測困難な社会」というフレーズが舞い、A I（人工知能）の発展や地球環境問題、異常気象などへの不安が人々を包んでいた。実際、小・中学校で学習指導要領が全面実施されて以来世界はコロナ禍に覆われ、安全保障や生活の安心安全を脅かす出来事がいくつも起きている。これらのような過去に例のない事案に直面した時、学校で学んだコンテンツはどのぐらい役に立つだろう。

子どもたちは将来、身近な問題から社会的に重要な問題まで、様々な問題に直面するであろう。それらを自分で解決しなければならないとき、問題を分析し解決方法を考え有効な手立てを講じていかなければならない。その際に必要なのは、学んだことを身に付けているだけではなく、それらを活用して新たな知見を生み出し、課題を見つけ問題を解決していく力である。

学んだことを活かしていくには、課題に直面した時、自分が学び身に付けていることを把握していなければならない。そして何が自分に不足しているか、またそれを補うにはどうすればよいかを考えることができる力を育成することが、学校教育に期待されている。

とはいえ、予測困難な社会に将来どのような問題が起きるか、個々の生徒が将来どのような問題に直面するかを完全に見通すことは不可能である。子どもたちが上述した力を身に付け、将来活用できるようにするためのトレーニングを積んでおくことが肝要で、教師はそのための指導改善に向けて不断的努力をしなければならない。

そこで将来を担う子どもたちに育成すべき必要な資質・能力の一つとして「メタ認知する力」を挙げる。自分に何ができないか、できるようするにはどうすればよいかを考えることがメタ認知であり、奈須正裕著「『資質・能力』と学びのメカニズム」（東洋館出版社 2017 年）には「メタ認知が高い子は、新たな領域を一から自力で学び進めることができ、熟達化する速度も速いことが知られています」と書かれている。このような力は、予測困難な社会には大変重要な力であろう。

今一つは「自ら学び続ける力」である。学校では課題解決のトレーニングを行うが、それは多くの場合、教師から与えられた課題を与えられた資料を使って探究活動を行う。探究の途上でつまづけば、教師が解決に向けて「発問」したり「新たな資料」を提示したり探究の方法を示唆したりして支援する。実社会においてもこのような存在があれば心強いが、必ずしもこのような恵まれた環境に身を置けるとは限らない。課題を見つけその解決に向けて有効な手段を講じるためには、現状をメタ認知したうえでさらに「自ら学び続ける力」が不可欠であろう。

② 子どもたちの現状・・・子どもたちの置かれている環境や状況、学習レベルなどを客観的に把握することによって収集した情報に基づき、子どもたちの現状について記述する。

ページ No

2

筆者は、中学校社会科の授業において、いわゆるワン・ページ・ポートフォリオ（以下単元シート）を活用した取組を行っている。内容のまとまりごとに「単元を貫く問い」を設定し、単元の始めに解を予想させ、知識理解を身に付け思考判断を繰り返し、単元の終末に解を出し、最後に予想と解を比較して自分の学びを振り返らせている。この最後の「振り返り」こそがメタ認知である。

生徒がどのような振り返りをしているか、中学1年生社会科地理的分野の単元「ヨーロッパ州」を例に見てみたい（表②-1）。ここでは、単元を貫く問い「ヨーロッパ連合(EU)はこれからも維持すべきだろうか？」について追究した。単元の導入では、EUについて簡単に説明して判断させた。そして以下のように各時の問いを追究し、最後にもう一度判断させ、始めの判断と比較しその変容を振り返らせた。生徒にとっては中学校に入学して5単元目となり、この学習活動にも慣れてきたところである。

表②-1 「中学校社会科地理的分野『世界の諸地域ヨーロッパ州』」単元計画

【単元を貫く問い】ヨーロッパ連合(EU)はこれからも維持すべきだろうか？		
小単元名	問い	活動
ヨーロッパ州の自然環境	ヨーロッパ州の文化と自然環境には、どのような関係があるのだろうか？	アルプス山脈を境にヨーロッパ南北の気候の違いを確認し、住環境の違いに着目し結び付けて考察。
ヨーロッパ文化の共通性と多様性	文化と言語と宗教には、どのような関係があるのだろうか？	語族とキリスト教の宗派の分布の一致を見出し、言語と文化の関係に着目し、文化の共通性と多様性について考察。
EUの成り立ちとその影響	EUの統合によって人々の生活はどのように変化したのだろうか？	国境の自由な移動など、EU統合が人々にもたらしたメリットについて考察。
ヨーロッパの農業とEUの影響	EUの統合によってヨーロッパの農業はどのように変化したのだろうか？	ヨーロッパの農業と食文化とのつながりを確認し、食料自給率の違いからEU統合の影響を考察。
ヨーロッパの工業とEUの影響	EUの統合によってヨーロッパの工業はどのように変化したのだろうか？	国際分業の進展を確認し、貿易自由化によるメリットとデメリットについて考察。
EUが抱える課題	EUの統合によってどのような課題が生じているのだろうか？	労働力の移動からEU域内の経済格差について考え、さらに社会状況の変化による移民・難民の増加による課題について考察。

以上のように、この単位では、ヨーロッパの自然環境や言語、宗教からの影響や背景について考え、当初は超大国に対抗できるような経済圏の構築を目指した EU という新たな枠組みが、その結びつきゆえに生じている課題について知り、今後この枠組みをどうしていくべきかについて考えた。

このような学習を経て、生徒が自分の学びをどう認知しているか、以下に単元シートの振り返りをいくつか挙げて検証する。

生徒 A：EU にはもっとたくさんのよいことがあると思っていただけれど国によっては、よいことがほとんどないことが分かった。

生徒 B：最初は何もわからなかったけど EU を学習して意見が言えるようになってよかった。

生徒 C：EU の名前は聞いたことがあったけど、この単元を学習して EU には経済格差などさまざまな問題があることがわかりました。

生徒 D：EU のことを深く知るか知らないかでこんなにも考えが変わるのだと思って何事も慎重に知っていきたい。

生徒 E：考えはあまり変わらなかったけれど、双方の詳しい事情が知れた。友達の意見を聞いて、とても難しい問題だなと思った。

生徒 F：経済格差など難しい言葉が出てきたのでがんばっておぼえたいです。

生徒 G：ヨーロッパは大きい国で経済が発展しているけれど、統合によって解決しにくい課題が生じて国ごとで不公平になることがあるんだと初めて知りました。

生徒 H：初めは相談するといいのだと思っていただけれど、EU がなかったら東ヨーロッパがもっと苦しくなったり格差で工業、移動に問題が起こったりすることがわかりました。

生徒 I：意見は変わらないけれど、はじめは軽い考えだったけれど、学習後は命など深く考えられているなと思いました。

これら生徒の記述の傾向は大きく二つの類型に分けられる。それは①学習内容に関すること（A，C，E，G，H）②自分の認知に関すること（B，D，F，I）である。注視したいのは類型②で、生徒 B は「意見が言えるようになった」、生徒 D は「何事も慎重に」生徒 F は「がんばっておぼえた」と学習前の学習後の自分の学習に取り組む態度に言及している。自ら学び続ける力にもつながる認知であろう。生徒 I は「深く考えられているな」と自分の記述をメタ認知し、その変容を第三者的に見ることができている。類型①の振り返りも大切だが、それをさらに高次の視点から見たものが類型②であろう。今後より多くの生徒が類型②のような視点から自身をメタ認知できるようになり、学習を自己調整できるようになることを目指したい。

※本実践の問いは、「草原和博・大坂遊編著 『学びの意味を追究した中学校地理の単元デザイン』（明治図書 2021 年）」より引用した。

③ 教育支援の方針…収集した現在の情報に加え、過去の実践経験や知見（失敗）なども踏まえ、教育支援の方針を記述する

ページ No

4

生徒のメタ認知する力を鍛え、自ら学び続ける力を育成するには適切なスパンで取り組む必要がある。学習指導要領では、それを「内容のまとまりごとに」という文言で表している。一方で、内容教科といわれる社会科では知識注入型の授業が中心であった。知識注入型授業の典型は、内容項目間のつながりや因果関係、影響などが意識されることなく、それらの表記の仕方と意味を記憶し再生できるようにする授業である。このような授業は、内容項目のつながりや分布、比較、推移など学習指導要領で主張されている「見方・考え方」を働かせるという視点が欠如している。このような欠点を補う方法の一つが、単元レベルという適切なスパンで生徒の学びを見取る「単元シート」の活用である。

筆者も過去には、内容項目を理解させることに注力し、面白おかしく、覚えやすく、生徒が楽しく参加できる授業を目指していた。しかし、アジア州の自然・文化・農業・工業を学び、その次はヨーロッパ州の自然・文化・農業・工業を学び、次は…と続く学びは、生徒にとってはページをめくるたびに暗記事項が増えていくだけで、真の学びからは程遠い。テストではそれらの暗記事項を暗記したとおりに再生すれば良いので深く考える必要はない。必要がなければ深く考えない。「使える」知識に発展しようがないのである。統計調査したことはないが、生徒の身に残る知識は、授業者が工夫し面白おかしく進める授業も、教科書通りに漫然と進める授業も、そう大きく変わらないのではないだろうか。

社会は変化するものであり、現在身に付けた知識理解は絶対ではなく、数年後にはそこに含まれる概念あるいは解釈が180度転換することもある。身に付けた知識理解を相対化して批判的に思考し、吟味し、新たな知見を自ら生み出せるようにするには、なぜ自分がそのように理解し解釈したのかを第三者の目で見取る取組を学校教育で繰り返しておく必要がある。そしてそのためには教師の側も、教科書に書かれている知見を所与のものとせず、なぜこのように書かれているのか、なぜこの項目が重要項目として取り上げられているのかなど、相対化して生徒に伝える姿勢が必要であろう。内容を絶対的な所与のものとしている間は、生徒の学びに効果的な問いや学習活動を構想することはできない。一歩引いた目線で内容項目を吟味し、授業を構成することが大切である。そのためには内容のまとまりを意識して授業を構成する単元レベルの授業構想が不可欠である。

④ 授業計画と準備状況…教育支援の方針をもとに、「自分がいつ、何をどのように行うのか」具体的な実践や行動に落とし込み、来年度以降の授業計画と準備状況を明確に記述する。

ページ No

4

具体的な工夫のキーワード

単元レベルでの授業構成/IDM理論

表④-1は、以上の理論に基づいて作成した中学2年生社会科の年間指導計画である。要点は、(1)年間を通して単元レベルで授業を計画し、単元シートを使って生徒のメタ認知を鍛えること(2)1学期は評価ルーブリック作成期、2学期は評価ルーブリック共有練習期およびIDM理論に基づくパフォーマンス課題、3学期は年間評価総括およびIDM理論に基づくパフォーマンス課題熟達期とすることである。特に要点(2)は、ルーブリックを作成しそれを意識しながら課題に取り組ませ、学習目標を達成するための計画である。1学期は単元シートを使って形成的評価を行い、生徒の馴化を促すとともにルーブリック作成のための診断的評価を行う期間とする。2学期はそうようにして作成したルーブリックを生徒と共有し、生徒がルーブリックに基づいた記述やパフォーマンスを行えるように取り組む。ルーブリックの作成は生徒の成長に合わせて継続して改善していく。またそのルーブリックと自分の学び

を意識しメタ認知しながら IDM 理論に基づくパフォーマンス課題に取り組ませ、自ら学び続ける力の育成にもつなげる。3 学期はこうして育成してきた社会科の資質・能力を総括的評価する。指導要録に残す評価を、その生徒が持てる資質・能力が最大限に発揮された時点の評価材料を用いるため、1～2 学期は評価スタンダードのルーブリックを生徒と教師で作り上げ、3 学期に総括的評価する計画である。

表④-1 資質・能力を育成し評価するための年間指導計画(中学 2 年生社会科)

週	指導内容など	評価について	評価材料
4 月第 1 週	春休み		
4 月第 2 週	新学期開始・学級開き		
4 月第 3 週～	授業開き・ガイダンス (地理的分野)身近な地域の調査(4)	診断的評価・単元シートについて説明	
4 月第 5 週～	日本の地域的特色(12)	形成的評価期	
5 月第 4 週～	九州地方(6)	ルーブリック作成期	
6 月第 2 週	中間テスト		テスト結果
6 月第 3 週	中国・四国地方(6)		
6 月第 4 週	中部地方(6)		
6 月第 5 週	期末テスト		テスト結果
7 月第 2 週	関東地方(7)		
7 月第 4 週～	夏休み		
8 月第 4 週～	東北地方(6)	ルーブリック共有期	
9 月第 2 週～	北海道地方(6)		
9 月第 4 週～	近畿地方(6)表④-2		パフォーマンス課題
10 月第 1 週～	(歴史的分野)大航海によって結びつく世界(3)		
10 月第 3 週	中間テスト		テスト結果
10 月第 4 週	戦乱から全国統一へ(3)		
11 月第 1 週	武士による全国支配の完成(4)		
11 月第 2 週～	天下泰平の世の中(6)		
11 月第 4 週	社会の変化と幕府の対策(3)		
11 月第 5 週	期末テスト		テスト結果
12 月第 1 週～	欧米諸国における「近代化」(5)		

12 月第 3 週	開国と幕府の終わり(4)表④-3		パフォーマンス課題
12 月第 4 週	明治政府による「近代化」の始まり(3)		
12 月第 5 週	冬休み		
1 月第 3 週	近代国家への歩み(4)	ルーブリック活用期	
1 月第 4 週～	帝国主義と日本(4)		
2 月第 2 週	アジアの強国の光と影(3)		
2 月第 3 週	第一次世界大戦と民族独立の動き(4)表④-4		パフォーマンス課題
2 月第 4 週	学年末テスト		テスト結果
3 月第 1 週～	高まるデモクラシーの意識(3)		
3 月第 3 週	春休み		

※「社会科中学生の歴史―日本の歩みと世界の動き―」「社会科中学生の地理―世界の姿と日本の国土―」（いずれも帝国書院 2021 年）により作成

ページ No	6
--------	---

パフォーマンス課題を行う単元の開発には、IDM 理論を用いる。IDM 理論とは、Inquiry Design Model の頭文字で、NCSS（全米社会科協議会）を中心にアメリカで提唱されている。問い、タスク（活動）、資料の 3 点を中核にして授業を組み立て、Blueprint（青写真）と呼ばれる 1 枚物シートに単元デザインを表現することを特色とする理論である。その目的は、C 3 Flame Work(College Career Civic life)の概念に基づき、論証の能力を高め、子どもと教室と社会を接続させることである。これは、社会に開かれた教育、学びに向かう力・人間性を育む学習指導要領のねらいとも一致している。次ページから掲載している表④-2～4 は、IDM 理論の肝といえる Blueprint（青写真）である。これらを見ると分かるが、詳細な単元指導計画ではない。やむにやまれぬ、探究する必然性のある問いとそれを探究し社会に向けて活かしていくためのポイントをまとめたものである。これを見れば、学習の目標や評価の方法がわかるような設計図である。詳細な活動については、学力や発達段階に合わせて調整したりアレンジしたりしていくことが可能であり、むしろそうしながら生徒のパフォーマンスを最大限に発揮させていくようにする余地を残している。

なおこれらの理論と方法は、「草原和博・渡邊巧編著『学びの意味を追究した中学校歴史の単元デザイン』」および「草原和博・大坂遊編著『学びの意味を追究した中学校地理の単元デザイン』（いずれも明治図書 2021 年）を参考にした。表中の語句説明は、10 ページに記しておいた。

表④-2

ページ No

7

地理的分野「近畿地方」環境と開発の探究				
学習指導要領との対応と、見方・考え方	(地理的分野) 1 目標 (3) より「よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究、解決しようとする態度を養う」に関連し、2 内容 C 日本の様々な地域 (3) 日本の諸地域⑤その他の事象を中核とした考察の仕方として、位置や分布、空間的相互依存作用などに着目し、公正に選択・判断する力を養う。			
探究に向けた環境作り	琵琶湖は、近畿の水がめと呼ばれ、近畿地方 1000 万人の生活用水や工業用水を供給している。一時期に比べると水質は改善されているが、今後もその維持に向けた取り組みが欠かせない。しかし、水源である滋賀県の住民だけがそのコストを請け負うことでよいのか。			
CQ	環境維持のためのコストはどのように分担すべきか？			
SQ 1	SQ 2	SQ 3	SQ 4	
琵琶湖の水はどのように役立てられているのだろうか？	高度経済成長のころから、琵琶湖の水質はどのように変化してきたのだろうか？	琵琶湖の水質改善の取り組みは、どのように行われてきたのだろうか？	琵琶湖の水を利用する人々には、水質維持のためにどのような義務があるのだろうか？	
PT	PT	PT	PT	
琵琶湖の水を利用している府県の人口や土地利用をまとめよう。	阪神工業地帯の発展から、琵琶湖淀川水系の工業化のようすをまとめよう。	有機リン系洗剤の使用禁止までの人々の動きをまとめよう。	琵琶湖の水利用税を導入することの是非を考えよう。	
資料	資料	資料	資料	
総括的PT	琵琶湖の水利用税について、想定される賛成意見と反対意見をまとめる。			
発展的PT	反対派と賛成派がそれぞれ人々の支持を得るためのチラシを作成し、どちらに賛同できるか、クラスなどで投票する。			
社会に向けた知的な行動	滋賀県、京都府、大阪府にある琵琶湖淀川水系の各地方公共団体の関係者に取材し、琵琶湖の水質維持改善のための取り組みについて聞いたり、水質の維持改善を訴える方法を提案したりする。			

表④-3

ページ No

8

歴史的分野「開国と幕府の終わり」国内秩序維持の探究				
学習指導要領との対応と、見方・考え方	(歴史的分野) 1 目標 (2) より「歴史に見られる課題を把握し、複数の立場や意見を踏まえて公正に選択・判断」する力に関連し、2 内容 C (1) ア(ア)欧米における近代社会の成立とアジア諸国の動き (イ)明治維新と近代国家の形成について推移・相互の関連に着目して考察する力を養う。			
探究に向けた環境作り	小学校では、江戸幕府滅亡についてペリーの来航、開国、戊辰戦争という一連の流れを学習している。日本が近代化の波にのまれていくのはある意味歴史の必然であったとしても、徳川家が政権の座から追放されたのはなぜなのか。ここに着目して江戸幕府の終わりについて追究する。			
CQ	徳川家が政権を保てなかったのはなぜだろう？			
SQ 1	SQ 2	SQ 3	SQ 4	
欧米諸国の近代化は、アジアにどのような変化をもたらしたのだろうか？	飢饉や一揆の増加に対し、幕府や諸藩はどのように行動したのだろうか？	ペリーはなぜ来航し何を要求してきたのだろうか？	大政奉還のねらいは何だろうか？なぜねらいが実現できなかったのだろうか？	
PT	PT	PT	PT	
アヘン戦争のニュースに接したときの人々の感情を立場の違いを踏まえて考えてみよう。	幕府の打ち出した政策が上手くいかなかった理由と雄藩が上手く言った理由を比べよう。	ペリーがたった4隻で幕府に要求を通すことができた理由をまとめよう。	大政奉還と王政復古の大号令に込められていた思いを考えまとめよう。	
資料	資料	資料	資料	
総括的PT	徳川慶喜と薩長同盟がSNSで意見をぶつけ合っている様子を想定してみる。			
発展的PT	徳川慶喜と薩長同盟に分かれ、徳川家を新政府中枢に残すか残さないかでディベートを行う。			
社会に向けた知的な行動	様々な人々の思いにこたえて長期政権を築くために大切なことは何か。現代の長期政権の政策とくらべて考え、選挙公約を作成する。			

表④-4

ページ No

9

歴史的分野「第一次世界大戦と民族独立の動き」国際秩序維持の探究			
学習指導要領との対応と、見方・考え方	(歴史的分野)目標 1(2)より「歴史に見られる課題を把握し複数の立場や意見を踏まえて公正に選択・判断したりする力、思考・判断したことを説明したり」「議論したりする力を養う」に関連し、内容 C (1) ア(オ)第一次世界大戦前後の国際情勢と大衆の出現について、推移や影響、因果関係に着目して多角的・多面的に考察する。		
探究に向けた環境作り	戦争が起こる原因とその影響について、倫理的な視点以外からも見ていきたい。なぜ、多くの非戦論があったのに、日本は第一次世界大戦に参戦したのだろうか？		
C Q	第一次世界大戦とはどのような戦争だったのだろうか？		
S Q 1	S Q 2	S Q 3	S Q 4
なぜ第一次世界大戦が はじまったのだろうか？	日本は、第一次世界大戦にどのような立場で参加したのだろうか？	欧米では、第一次世界大戦後にどのような変化があったのだろうか？	アジアでは第一世界大戦後になぜ民族独立の動きが活発化したのだろうか？
P T	P T	P T	P T
自国を守るために同盟国をつくるのは、他国にどのような思いを抱かせるのか。	帝国主義に着目して、日本とアジア各国の動きをまとめよう。	欧米では、第一次世界大戦の原因と結果をどのようにとらえていたのか。マトリクスにまとめよう。	ガンディーの非暴力・不服従という主張からどのような思いが読み取れるか、まとめよう。
資料	資料	資料	資料
総括的 P T	戦争はなぜしてはいけないのか。それがわかっているにもかかわらず戦争するのはなぜか。思考ツールにまとめて C Q に答えてみよう。		
発展的 P T	思考ツールを活用した総括的 P T について、互いに発表して相互評価をしよう。		
社会に向けた知的な行動	戦争が悪だと分かっているにもかかわらず戦争がなくなるのはなぜか。現代の事例をもとにその理由を調べ、論理的に平和をアピールする動画を作成し、配信しよう。		

※各表中の「資料」については、実践する際の生徒の実態に基づき、適切に選択する。

【語句説明】

C Q (compelling question) …やむにやまれぬ問い。学習者が探究せざるを得ないと納得する問い。

S Q (supporting question) …C Qを探究するための補助的な問い。

P T (performance task) …形成的パフォーマンスタスクのことで、これに取り組むことにより、S Qに答えられるようになることを意図している。

資料…教材等の総称。PTに取り組むための基礎的なデータであり、表現するときのエビデンスともなりうる。

総括的 PT…総括的パフォーマンスタスク。単元を通じて C Q を粘り強く探究した成果を子どもが表現する活動。

発展的 PT…発展的パフォーマンスタスク。学習成果を個人で表現するだけでなく、他者との間で協働的に表現する活動。

社会に向けた知的な行動…社会に向けて発信したり、社会に働きかけたりすること。

語句説明からも分かるように、C Qは「単元を貫く問い」である。知識や問いの構造化が提唱されて久しいが、I DM理論とその方法もほぼ同じ理論的根拠に基づいている。また、「本質的な問い」を追究するために補助的な発問を繰り返して取り組んでいくという意味で「逆向き設計理論」ともほぼ同じである。評価の規準が示されていないが、各P Tにより評価の証拠は担保できている。ルーブリックを作成しながら進めていくことは、先述したとおりである。

堀哲夫著「新訂一枚ポートフォリオ評価 OPPA 一枚の用紙の可能性」(東洋館出版社 2019 年)によれば単元シートは発達の最近接領域にアプローチできることが大きな利点である。個々の生徒が最も必要とする支援を常時把握し効果的な手立てを適宜講じることができることを活かし、メタ認知して自ら学び続ける力を養う単元の開発、評価の方法を、IDM 理論と組み合わせて行い、その実践を通して、理論と実践の往還により資質・能力を育む学びの実現を追究していきたい。